

9.  $^{18}\text{F}$ -FDG-PET による口腔癌への応用

船木 聖己 関山 三郎  
(岩手医大・歯・二口腔外)  
世良耕一郎 旗野健太郎 佐々木敏秋  
(岩手医大・サイクロ)

腫瘍組織の  $^{18}\text{F}$ FDG の摂取変化を指標として癌化学療法および放射線療法などの治療効果判定, 癌の検出などに応用し,  $^{18}\text{F}$ FDG-PET を用いて口腔癌の患者に対して dynamic scan を行い, 癌治療前, 後において Differential Uptake Ratio (DUR) を用いて検討した。

本報告の治療前の DUR 値は  $2.06 \pm 0.27 \sim 11.57 \pm 0.95$  で, 平均値は  $5.17 \pm 0.49$  であるのに対して, 治療後は,  $1.87 \pm 0.39 \sim 5.34 \pm 0.46$  で, 平均値は  $2.85 \pm 0.26$  となり, DUR 値の減少が認められた。臨床効果と DUR 値の検討からも DUR 値の減少率に有意差が認められ癌治療効果判定に有用であることが示され, 症例呈示の治療後に hot spot が認められ, その部位の病理学組織所見は大星・下里分類による Grade II B で腫瘍細胞の残存が認められ, 腫瘍の検出にも有用であることを示した。

頭頸部領域における  $^{18}\text{F}$ FDG-PET は, 癌治療効果判定, 癌の検出などに应用できる可能性がきわめて高いことが示唆された。

10. 脳腫瘍の  $^{201}\text{Tl}$ -Cl SPECT

丸岡 伸 山崎 哲郎 田村 亮  
負門 克典 五嶋 能伸 坂本 澄彦  
(東北大・放)

脳腫瘍再発の診断と治療前脳腫瘍の悪性度判定に対する  $^{201}\text{Tl}$ -Cl SPECT (TI SPECT) の有用性について検討した。対象は 1994 年 7 月～1995 年 5 月に TI SPECT を施行した脳腫瘍 27 例 (男性 17 例, 女性 10 例) で, 術後再発疑が 14 例, 放治後再発疑が 2 例, 治療前症例が 11 例である。方法は  $^{201}\text{Tl}$ -Cl 111 MBq を静注後 15 分および 3 時間後に MULTI SPECT 3 にて撮像し, 視覚的に MR 像と比較した L/N 比を求めて検討した。再発疑では 16 例中 13 例に TI の集積を認め (astrocytoma GIII 術後再発 5 例, glioblastoma 術後再発 5 例, 放治後再発 2 例), 再発例で集積を認めなかった 3 例はいずれも病巣が小さかった。治療前症例では 11 例中 3 例にしか TI の集積が認められず, astrocytoma GIII でも集積を認めないものが多かつ

た。TI SPECT は脳腫瘍再発の診断に有用であった。

11.  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI による肺癌リンパ節転移巣の検出

小野寺祐也 久保田 恒 安久津 徹  
浜本 泰 駒谷 昭夫 高橋 和榮  
山口 昂一 (山形大・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI SPECT による肺癌リンパ節転移巣の検出能を術後の病理所見と対比して検討した。対象は 1994 年 12 月～1995 年 4 月に手術した 14 例で内訳は  $\text{N}_0$  7 例,  $\text{N}_1$  5 例,  $\text{N}_2$  3 例,  $\text{N}_3$  0 例である。リンパ節の同定には thin section helical CT を用い, SPECT と対比した。郭清リンパ節の総数は 92 個で, うち 52 個に MIBI 集積を認めたが, 転移を確認したのは 9 個だけであった。集積がなく転移を確認したのも 2 個あった。集積部と肺野のカウント比を出し転移群と非転移群で比較したが有意差はなかった。今回の検討ではリンパ節転移検出に  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI の有用性は認めなかったが, 対象群を増やして, 部分容積効果を考慮し, さらに検討が必要と思われた。

12. 悪性黒色腫症例に施行した  $^{123}\text{I}$ -IMP 全身スキャンにおける骨髄描出の病的意義に関する検討

鐘ヶ江香久子 伊藤 和夫 塚本江利子  
加藤千恵次 中駄 邦博 望月 孝史  
(北大・核)  
国分 一郎 皆川 英彦 (同・形成)

悪性黒色腫症例に対し施行する  $^{123}\text{I}$ -IMP シンチグラムの全身スポット像において, 通常では集積は強くないと思われる骨髄の描出が腰椎背面像では 26.3% に認められた。今回は正面像において軽度から中等度の骨髄のびまん性の集積に病的意義があるか否か検討した。明らかな重篤な遠隔転移がないと思われる症例においても中等度の集積は認められ, 必ずしも病的ではない可能性があった。原因は特定できなかったが, 化学療法, 貧血, 肝硬変との関連は明らかでなかった。背面像での評価基準については今後検討したい。